

第2章 《わがまちの姿》

第1節 位置と地勢

合志市は、県都熊本市の北東に隣接します。北緯32度・東経130度の地点にあり、総面積は53.19平方キロメートル（東西約12キロ、南北約8キロ）です。

市域全体は緩やかな台地状であり、大きな河川や高い山地もなく、災害の少ない自然条件に恵まれた穏やかな地勢となっています。

北部地域は、阿蘇山の火山灰が堆積した黒ボクと呼ばれる火山灰性腐植土に覆われた広大な農地が広がり、農業生産の基盤となっています。

中央地域は、既存地域の住宅地が広がりをみせ、農業研究機関や医療機関、教育機関などの国有地・県有地などの広大地が集積し、緑多い癒しの空間を提供する一方、南部地域から中央地域への市街地の広がりを阻害する存在となっています。

南部地域は、熊本市と隣接しており住宅地と商業地からなる市街地を形成しています。以前から国道・県道及び私鉄沿線に発展し、近年では、既成市街地から連続して住宅地が広がり、新市街地を形成しています。



【合志市へのアクセス】

合志庁舎へ

<電車で>	
JR豊肥線 熊本駅から光の森駅まで	約30分
<バスで>	
水道町（熊本市内）から合志市役所前バス停まで	約50分
<車で>	
JR光の森駅から	約10分
熊本市内から	約35分
阿蘇くまもと空港から	約25分
九州自動車道 熊本インターチェンジから	約15分

西合志庁舎へ

<電車で>	
熊本電鉄株藤崎宮前駅から御代志駅まで	約30分
JR上熊本駅から熊本電鉄株御代志駅まで	約60分
<バスで>	
水道町（熊本市内）から御代志バス停まで	約40分
<車で>	
熊本市内から	約30分
九州自動車道 植木インターチェンジから	約20分

第2節 歴史

市内からは、縄文時代の遺跡が見つかっており、当時より人々が暮らしてきたことがわかります。弥生・古墳時代の遺跡が、塩浸川・上生川・合志川沿いに数多くあり、当時の人々の社会や生活の様子を今に伝えています。

合志市の名は、古代より続いた「合志郡」に由来します。日本書紀に「皮石郡」と見えるのがその初見で、他に「恰志」や「合志」などの表記も見られますが、当時は「加波志」と読んでいたようです。和銅6（713）年に出された、「地名は好字で表すように」との詔により、「合志」の字が定着したものと思われ、平成25年には、「合志」という地名が歴史に登場して1300年を迎えました。

現在の菊池市南部や菊陽・大津まで含んでいたこの合志郡の中でも、合志市域は、中世においては、菊池氏や合志氏が活躍する合志郡の政治の中心でした。

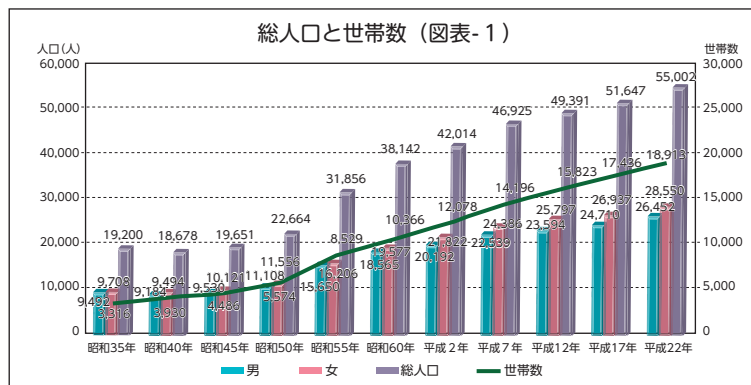
近世、肥後細川藩において合志郡竹迫手永に属していた当時の在町と村々は、明治9年、合併して現在の住所区分の名を冠した村となり、その後明治22年に町村制施行により再度合併し、それぞれ合志村と西合志村となりました。

昭和41年4月1日の町制施行で合志町、西合志町となり、その後、昭和46年には、両町域が熊本都市計画区域に指定されました。南部地区は市街化区域となり、熊本都市圏における新しい生活拠点としても発展を続け、平成18年2月27日の合併により、合志市となりました。

第3節 人 口

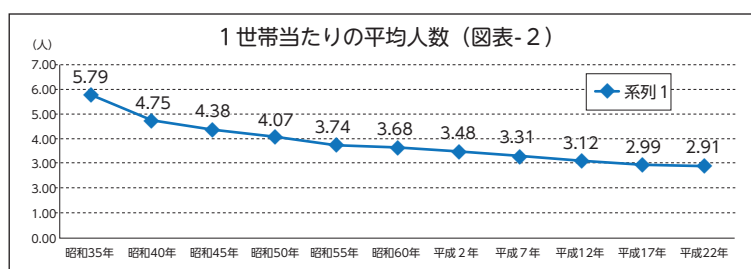
① 総人口と世帯数

平成22年の国勢調査による合志市の総人口は55,002人で、平成17年の前回調査より6.50ポイント増加し、昭和40年調査から引き続き増加の一途をたどっています。総世帯数も18,913世帯を数え、前回調査より8.47ポイント増加しています。



※ 資料は、平成22年国勢調査より

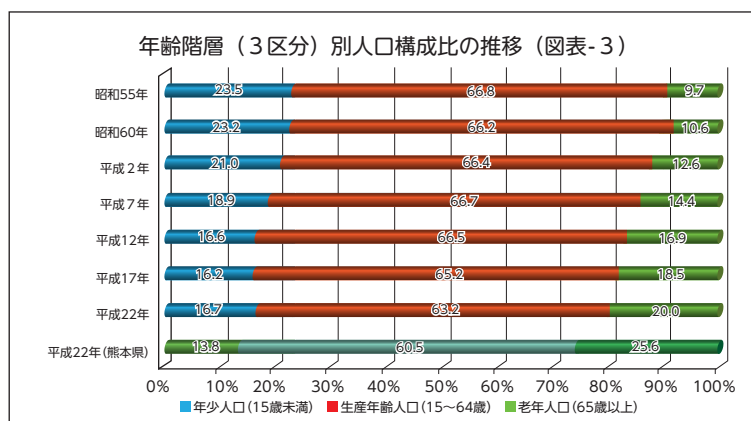
昭和46年の都市計画決定により急激に伸びましたが、世帯数の増加に対し、1世帯当たりの平均人員は年々減少しています。



※ 資料は、平成22年国勢調査より

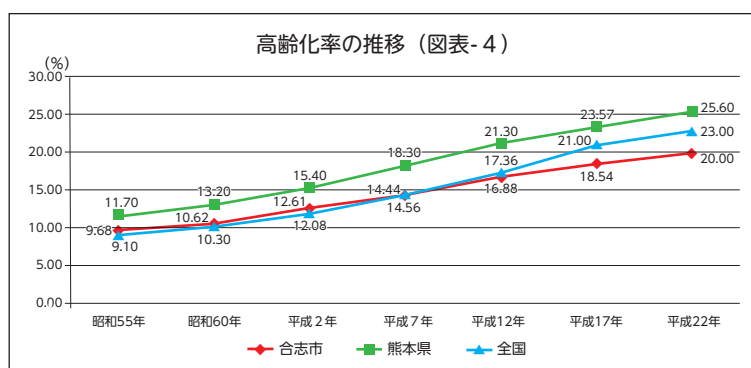
② 年齢階層別人口と高齢化率

昭和55年と平成22年の年齢階層（3区分）別人口構成比の推移をみると、15歳未満の年少人口の割合は6.8ポイント減少しているものの、平成12年からほぼ横ばい状態にあります。15歳から64歳までの生産年齢人口はわずかながら減少傾向にあります。65歳以上の老年人口割合は10.3ポイント増加しており、着実に高齢化が進んでいることを表しています。



※ 資料は、平成22年国勢調査より

平成22年の熊本県と本市の人口構成を比較すると、年少人口割合は2.9ポイント高く、老年人口割合では5.6ポイント低い割合となっており、県内では年齢構成の若い地域であることがうかがえます。



※ 資料は、平成22年国勢調査より

③ 人口動態

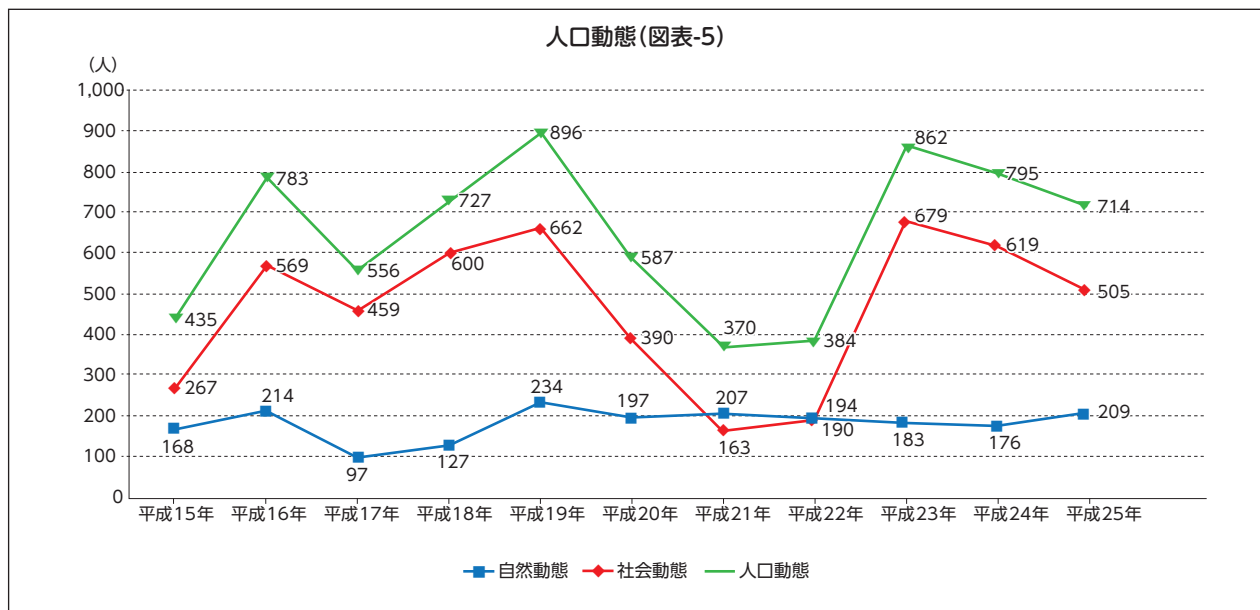
自然動態

自然動態は、出生数から死亡数を引いた値で示されますが、本市においては、大きな起伏がなく、ほぼ一定を保って推移しています。

社会動態

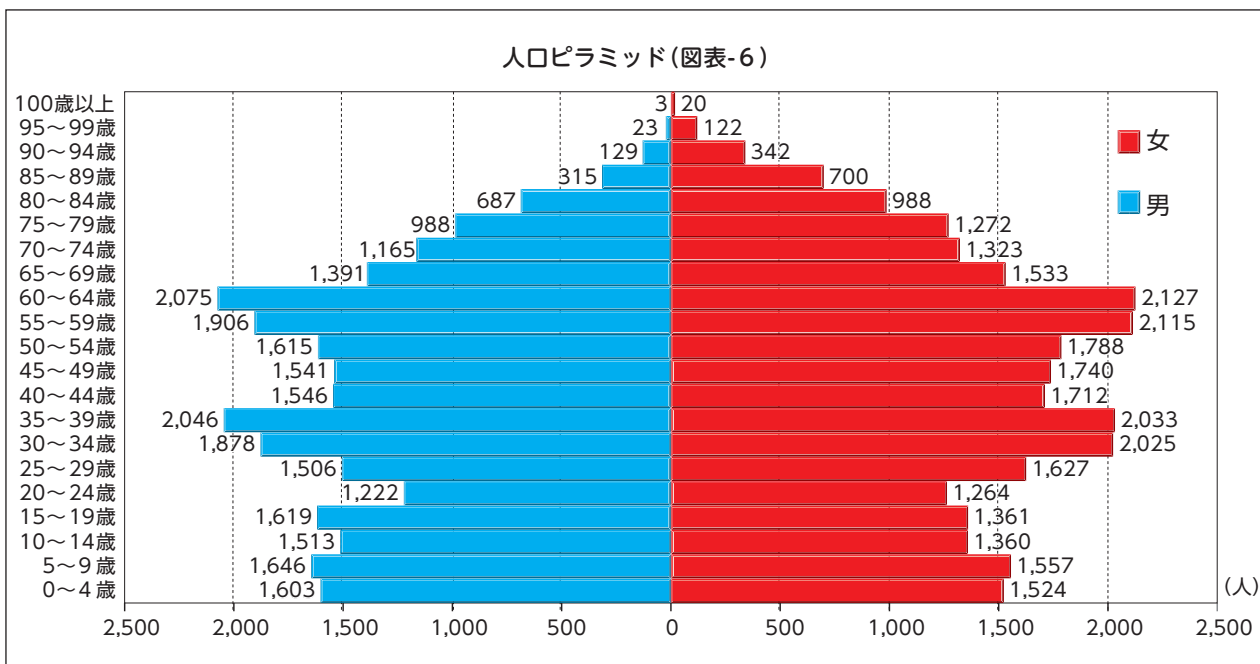
社会動態は、転入者数から転出者数を引いた値で示され、本市の特徴でもある転入者が転出者を上回る傾向は、各年を通じて続いています。

各年によって増減があるのは、景気の動向により宅地開発の進展に影響を受けた推移となっています。



※ 資料は、「熊本県の人口」より

④ 人口ピラミッド



※ 資料は、平成22年国勢調査より

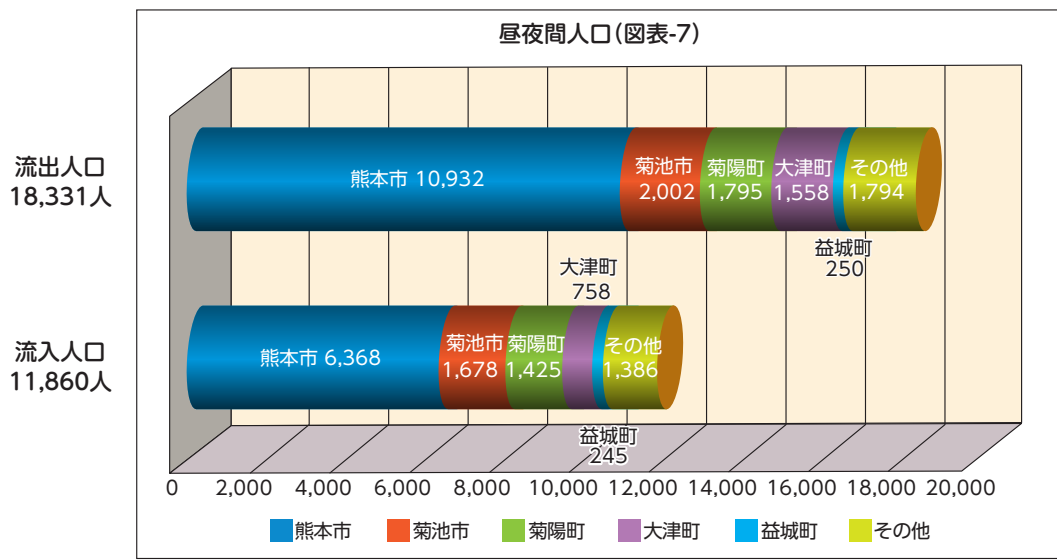
⑤-1 昼夜間人口

本市の通勤、通学者による流入・流出の状況を見ると、流出人口は18,331人、流入人口は11,860人で、昼間人口は、6,471人の流出増により48,531人となっています。(平成22年国勢調査人口55,002人、昼夜間人口比率88.23%)

流出では、熊本市への通勤、通学が最も多く60%近くを占め、次いで菊池市、菊陽町、大津町と続いています。

流入でも、熊本市からの流入が50%で最も多く、菊池市、菊陽町と続いています。

夜間人口55,002人に対し、流出人口及び流入人口とも熊本市が最も多く、ベッドタウンとしての性格を示しています。

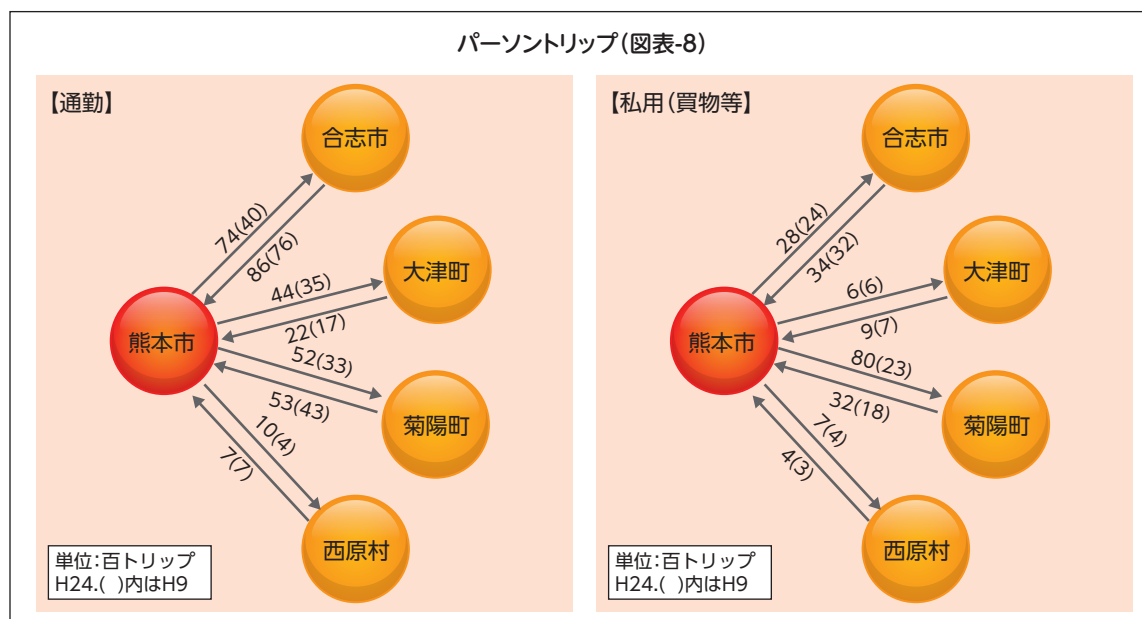


※ 資料は、平成22年国勢調査より

⑤-2 パーソントリップ調査における通勤通学等の状況変化

熊本都市圏内の人の移動に関する状況を調査するパーソントリップ調査の結果を見ると、平成9年度の調査では熊本市への人の流れが圧倒的に多いのに対し、平成24年度の調査では熊本市から合志市への人の流れが非常に多くなっています。

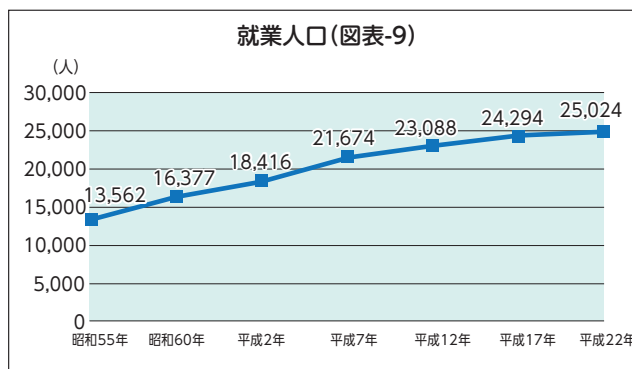
熊本市から市内大型工業団地への通勤者、光の森への買い物客等、熊本都市圏における人の流れが大きく変わっていることがわかります。



第4節 産 業

① 産業別就業人口

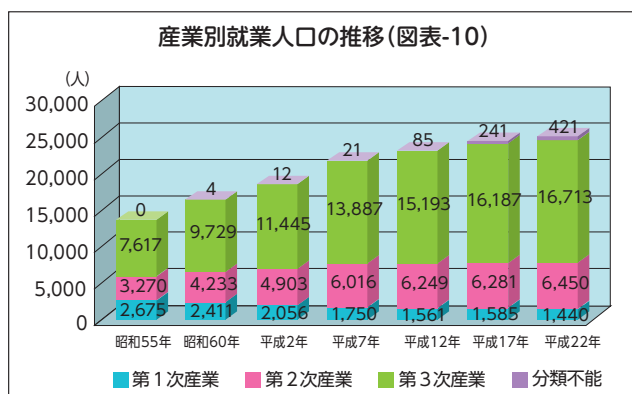
本市の就業人口は、平成22年国勢調査で25,024人(分類不能の就業者を含む。)となっており、以前から増加を続けていますが、増加率は鈍化しており、平成17年と比べ730人の伸びとなっています。



※ 資料は、平成22年国勢調査より

第1次産業については減少を続けており、昭和55年と比べると4割以上も減少し、第2次産業は景気低迷にありながら緩やかに伸び続けています。

第3次産業は最も増加傾向にあり、昭和55年と比較すると2倍以上増加しています。



※ 資料は、平成22年国勢調査より

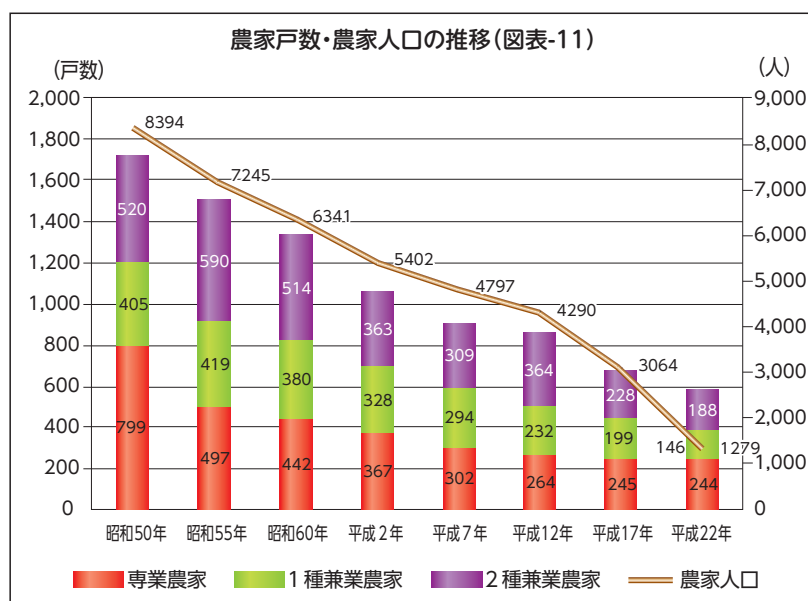
※第1次産業とは、自然界に働きかけて直接に富を取得する産業が分類され、農業、林業、漁業のことをいいます。

※第2次産業とは、第1次産業が採取、生産した原材料を加工して富を創り出す産業が分類され、建設業、製造業、鉱業のことをいいます。

※第3次産業とは、第1次産業にも第2次産業にも分類されない産業が分類され、商品やサービスを分配することで富を創造することが特徴で、電気・ガス・熱供給・水道業、情報通信業、運輸業、卸売・小売業、金融・保険業、不動産業、飲食店、宿泊業、医療・福祉、教育・学習支援業、サービス業など、他に分類されない産業のことをいいます。

② 農家戸数・農家人口の推移

農家戸数と農家人口の推移をみると、農家戸数は年々減少しています。昭和50年から比べると平成22年現在で6割以上減少し、農家人口も年々減少しており、昭和50年から平成22年現在で8割以上減少しています。

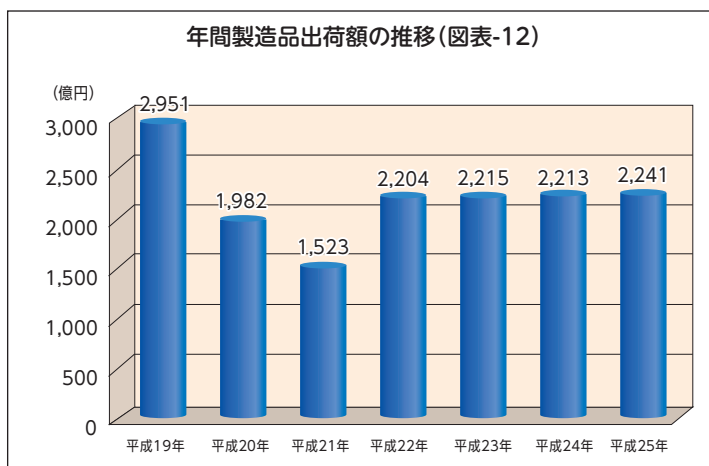


※ 資料は、平成22年世界農林業センサスより

※ 農家人口は、農家世帯全員の数

③ 製造品出荷額

平成20年のリーマンショックは本市にも大きな影響を与え、平成20年度、21年度と大きく前年度から出荷額が減少し、平成21年は平成19年の約5割の額まで落ち込みました。平成22年度以降は回復傾向にはあるものの、未だリーマンショック前の水準まで持ち直すには至っていません。

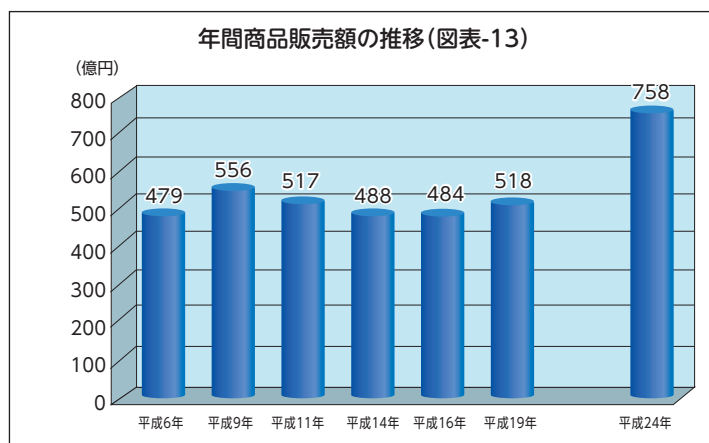


※ 資料は、「工業統計調査」より

④ 年間商品販売額

年間商品販売額の推移をみると、平成9年までは好景気の影響から増加傾向にありました。消費税率が5%に引き上げられた平成9年以降はわずかに減少傾向に転じ、その後は横ばいで推移しています。

平成24年からは、経済センサスでの調査に変わっています。



※ 資料:H19まで商業統計調査(経済産業省)より
H24から経済センサス(経済産業省)より